

# 筑波技術短期大学聴覚部学生の英語統語能力

聴覚部一般教育等 都築 繁幸

**要 旨：**聴覚部の英語指導のレベル設定を定量的に把握するために英語統語能力検査を行った。その結果、聴覚障害学生群の平均得点は健聴中学3年生1学期群の得点にも及ばず、聾学校出身で英語Ⅱ未履習群は、健聴中学3年生1学期の約70%程度の得点であることが示された。また、英語Ⅱ履習群は健聴中学3年次2学期終了程度の得点であることが推測された。

**キーワード：**高等教育 聴覚障害者 英語統語能力 言語力

## 1. はじめに

本学聴覚部学生の英語力の実態を考えていくためには、入学以前の実状と入試レベルの観点から議論していく必要がある。

入試には、推薦入試と一般入試の2つがある。前者は、聾学校在籍者に限り、校長が推薦するもので、いわゆる学力試験を行わず、英語に関して言えば、高校の「英語Ⅰ」の履習が条件となっている。後者は、聾学校及び普通高校に在籍するものを対象とし、出題範囲は「英語Ⅰ」となっている。

現在、県立聾学校高等部普通科の多くは英語Ⅰまでしか授業を開設しておらず、生徒の勉学意欲とは無関係に、それ以上のレベルを学習する機会に恵まれていない状況にある。また、その内容は健聴の高校の英語Ⅰには達しておらず、中学の英語に留まっている。聾学校職業科では英語を代替科目にしており、英語の学習は高校1年次しか行っていない。一方、普通高校出身者の大半は英語Ⅱcまで履習しているが、読みと会話中心の授業について行けず、受験英語になじまず、定期試験前に友人からノートを借りて範囲を勉強するだけだと言う。

このように能力差、履習条件に差異が見られ、このことが本学の英語指導のレベル設定を困難にしている。

## 2. 目的

本学の聴覚障害学生に対する英語指導のレベル設定を検討していくために統語能力検査（キグレーら、1978）を行い、聴覚部学生と健聴者（中学3年生、大学生）の成績を比較することにより実態を把握する。

## 3. 方法

### 3.1 対象

聴覚部学生群は、本学学生とし、平成5年度において英語Ⅰと英語Ⅱの授業を受講している者、96名とした。健聴群は、中学生群と大学生群からなる。中学生群は、つくば市内にある中学校に在籍する3年次生、36名とした。大学生群は、本学と教育目的や内容や類似している国立大学に在籍している1年次生、78名とした。

### 3.2 手続き

キグレーらが開発した統語能力検査を用いた。これは、9つの下位検査からなり全部で120項目ある。設問は、4つのなかから正しいものを一つ選ぶものである。例題を示すと次のようになる。

#### 問題2

- a. We stopped boat.
- b. We stopped an boat.
- c. We stoped the boat.
- d. We stoped a the boat.

#### 問題37

The boy knows that the woman loves children.

- a. The boy loves the woman.
- b. The woman loves children.
- c. The boy knows children.
- d. The boy loves children.

#### 問題120

You waited for the boys. You sent a letter to the boys.

- a. You waited for the boys to whom you sent a letter to them.
- b. you waited for the boys to whom you sent a letter.
- c. You waited for whom you sent a letter to the boys.
- d. You waited for the boys to whom you sent a letter to the boys.

調査は、いずれも平成5年度1学期に行った。調査用紙を配布し、集団で行った。今回は、作業制限法で行い、おおよそ、80分から90分は要した。

### 3.3 結果の処理

正解1つにつき1点を与え、それを個人得点とした(120点満点)。今回は、個人得点の分析のみ次の項目に従って分析した。すなわち、(1)3群間の比較(聴覚障害学生群と健聴中学3年生群と健聴大学群)、(2)聴覚障害学生群の群内比較(学年別、履習別)、(3)健聴大学群の群内比較(能力別)という観点から結果を示す。

## 4. 結果

4.1 3群間の比較：聴覚障害学生群の平均は70.8点で健聴中学3年生群の75.4点にも及ばない。健聴大学群は95.8点であり本学学生と25点の差が見られた。

4.2 聴覚障害学生群の群内比較：聴覚障害学生群の特徴を見るために1年(46名)と2年(50名)の比較を行った。平均点では1年生が70.6点、2年生が70.9点で差が見られなかった。

そこで、高校における履習群別に分けて比較を行った。その結果、聾学校出身で英語Ⅱ未履習群(23名)は49.5点、聾学校出身で英語Ⅱ履習群(20名)は83.3点、普通校出身で英語Ⅱ履習群(53名)は76.6点であった。

4.3 健聴大学群の群内比較：この大学では英語の受講の際、能力テストを行い、能力別クラス編成で授業を行っている。その基準で2群に分けて見るとL群(36名)が90.7点、H群(41名)が100.8点であった。

以上の結果を高得点別に列挙すると健聴大学H群、健聴大学L群、聴覚障害者で聾学校出身かつ英語Ⅱ履習群、聴覚障害者で普通校出身かつ英語Ⅱ履習群、健聴中学3年生1学期群、聾学校出身で英語Ⅱ未履習群の順であった。

従って、聾学校出身で英語Ⅱ未履習群は、健聴中学3年生1学期群にも及ばず、更に、聴覚障害群は、健聴中学3年生1学期レベル以下の群とそれの3年生レベル到達群の2群に分かれていることが明らかとなった。

## 5. 考察

本学聴覚部の学生の多くは、英語が好きではないという。学生は、単語を覚えるのが面倒くさい、文法を覚えてもすぐ忘れる、普段の生活の中で英語を使わない、読んでも意味がわからない、英文和訳が苦手だ、英語の学習に意義を見出せない、等の理由を挙げる。しかし、3年になって就職試験に英語が出題される企業を選んだ学生は目の色を変えて補習・特別課題を申し込んでくる。2年生に就職の話

をすると「そんなに大変ならば就職試験に英語が出題される企業を選ばないから英語を勉強する必要がない」という。学生の勉強態度から見ると専門科目の課題をこなすことで精一杯で英語の勉強には手がまわらないようだ。ましてや、本学のように技術系大学の学生にとっては「技術修得」が主であって「英語」の時間はお付合と程度と考えている学生も少なくない。課題を出しても友人のものを写してくるだけで「独力」で解こうとはしない。試験の範囲を指定すれば、一夜づけで範囲をコピーマシンのように棒暗記してくるが、少しでも内容を変えた出題をするとお手挙げの状態である。

1クラス全体を健聴大学生レベルに合わせることは極めて困難である。筆者は、かつて健聴の大学での教職経験があるので健聴大学生と同じ教材を使って授業を試みた。その結果、約3倍の時間がかかった。10人1クラスであるために英語習得状況において完全に2つの山があることは経験的に予想はできていたが、定量的には把握できなかった。すなわち、英語Ⅱ履習群と英語Ⅱ未履習群とでは課題達成度に顕著な差が見られるのである。英語Ⅱ未履習群に焦点をあてて、一斉講義方式で行うと英語Ⅱ履習群は時間をもてあそんでしまい、学習意欲をなくしてしまうことが多いという「浮きこぼれ現象」が見られる。一方、英語Ⅱ履習群にレベルを合わせると英語Ⅱ未履習群は完全にお客さんになってしまい、「落ちこぼれ現象」が見られる。

すでに述べたように本調査は、本学の英語指導のレベル設定をどこに置くかを考えるための基礎的資料を得る目的で行われた。その結果、聾学校出身で英語Ⅱ未履習群は、健聴中学3年生1学期の約70%の得点であることが示された。おそらく健聴中学2年の1～2学期程度であるものと推測される。また、英語Ⅱ履習群は健聴中学3年次1学期終了程度の得点であると推測される。

年度によって若干変動はあるが、本調査の結果から10人1クラスの中に中学2年程度が3～4名、中学3年程度が4～5名、高校1年程度が2～3名いるものと思われる。このことは、本学の入試レベルとも関連してくる。本学では高校の必須科目である「英語Ⅱ」を入試科目にしているが、入学者に要求される英語習得レベルが最低でも中学3年1学期程度であることが本調査から類推される。本学に入学するまでに英語検定試験3級一次試験(中学校3年終了程度、筆記試験のみ)に合格している学生は、英語のみならず他の科目の成績も良好であることが確かに観察される。健聴者の中には英語は苦手だが、数学は得意である、また、その逆に英語は得意だが、数

学は苦手であるといった例も稀ではない。しかし、言語的学習に制約を持つ聴覚障害者の場合、国語以外の書記言語を更に習得するのはその人の国語力に大きく依存していることは容易に想像できよう。

以上の結果と先行研究をもとに本学聴覚部学生と同年令の聴覚障害者の言語力と英語統語能力の相対的な位置づけについて考えてみたい。図1において高等教育の対象と考えられるのは漸伸型であり、本学聴覚部学生は、同年令の聴覚障害者全体からみれば極めて高学力群に属していることがわかる。今後、漸伸型に含まれる児童生徒の絶対数を如何に確保し、拡充していくかを初等教育の段階から検討していくことが聴覚障害高等教育を発展するための基本要件であろう。

## 6. おわりに

今回検討したのは、英語の統語能力の側面だけである。

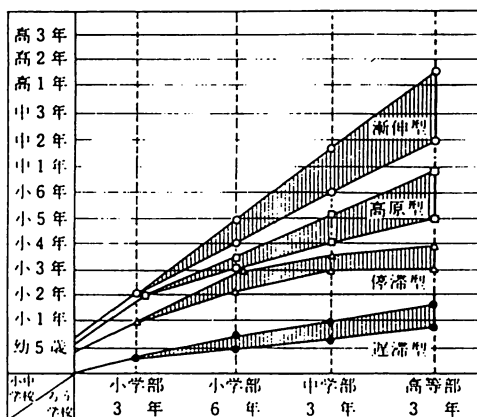


図1 学力レベルからみた発達類型の想定図 (都築, 1993)

表1 3群間の平均得点の比較

聴覚障害	健	聴
大学生群	中3・1学期群	大学生群
70.5 (14.51)	75.4 (14.20)	95.8 (15.18)

表2 聴覚障害学生群内の3群比較

聾学校出身英語Ⅱ履習群	81.3 (15.51)
聾学校出身英語Ⅱ非履習群	49.5 (15.01)
普通校出身英語Ⅱ履習群	76.6 (18.52)

英語力全体から見れば、コミュニケーション能力も検討していく必要があろう。また、聴覚障害学生の能力の評価は、多面的な視点から行う必要がある。英語の成績のみでその個人を評価すべきではない。しかしながら、定量的にも定性的にも何らかの評価を積み上げていかなければ教育科学としての「聴覚障害教育学」は確立しない。

## 7. 文献

- 都築繁幸(1992) 聴覚障害学生の英語学習に対するCAIの適用, 第26回全日本聾教育研究大会研究集録, 316-317.
- 都築繁幸(1993) 高等教育段階における聴覚障害者の教育, JOHN, 9, 2, 151-156.
- 都築繁幸(1993) CAIを利用した聴覚障害学生に対する英語指導, ろう教育学会第35回大会論文集, 116-119.
- 都築繁幸(1993) 聴覚障害者の高等教育から見た聴覚障害教育の課題(1), ろう教育科学, 34, 4, 165-175.
- 都築繁幸(1993) 聴覚障害学生の英語の学習様式, 第27回全日本聾教育研究大会研究集録, 12-13.

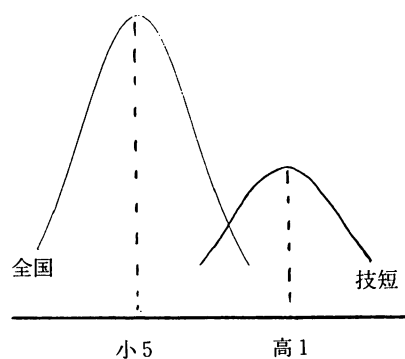


図2 言語力の分布想定図

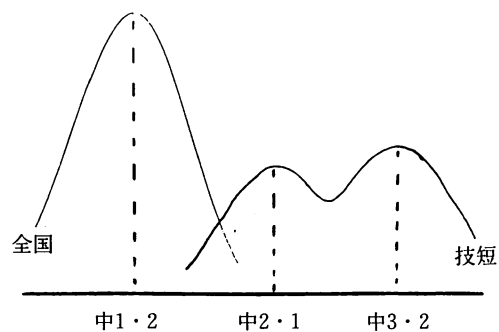


図3 英語力の分布想定図